New Nogata　2026、11、20

直方ミニバスケットボールクラブだより

ミニバス
共育コラム③

一つの経験から生まれる貴重な学び



大会を経験して子どもの中に残っているものは…

一つの大きな節目となる大会を終えました。

今回の大会は、参加している大会の中で、唯一予選リーグがあり、決勝があり、優勝チームが決まるという大会です。一つくらい、このような勝ち上がり大会に出場してみることも、子どもにとっていい経験になると思っています。勝ちたいと強く思い、役割を確認しそのためのゲームをつくる。そして、みんなが必死に声をあげてプレーしたり、応援したり、アドバイスを送ったり…、今の子どもたちの日常生活には、あまり経験することのない機会です。俗に言う「勝利至上主義」には反対ですが、競技スポーツの試合に出場する際は、「勝ちたい」と思ってがんばらなければ、楽しむことはできません。結果は、勝ちか負けか、いずれかが出ますが、する前から「負けてもいいや」と思って出場したり、試合しながらあきらめてプレーするのでは、必死でがんばる相手チームに対しても失礼です。そんなかまえで出場する試合からは、子どもは何も学ばないでしょう。

今回の大会に賭けてがんばってきた子には、勝敗にかかわらず、ここでの経験は貴重な学びになっていると思います。その思いが熱ければ熱いほど価値ある学びになっていると思います。今回は、自分で「がんばってきた」という実感がもてなかった子もいると思います。それでも、質は違いますが、「実感がもてなかった」ということも、ある種の学びです。それぞれの今回の経験が、その子その子にとって、どんな学びになったかは、これからの活動にあらわれてくると思っています。

子どもたちの先を考えた時、今大会のような経験も大事なことだと思っています。今回はバスケットの大会へのチャレンジでしたが、このような経験は、バスケットだけに生きてくるものではありません。これから進む中学校での生活、高校での生活、大学や社会人での生活、あらゆる場面に通ずるものだと思っています。

求められる“自分（たち）で考え、判断し、行動する力”

今、子どもたちをとりまくスポーツ環境は、より良く整備されているとは言い難い状況です。中学校は、部活動の地域移行（展開）の流れのなかで、子どもたちは大きく揺れています。学校の部活動の消失やクラブチームの出現、そこには、活動時間（遅い・長い）、活動場所（遠い）、必要経費（高額）、指導の在り方（勝利至上主義）など、さまざまな課題が浮かび上がっています。すべての子どもに平等・公正にスポーツの環境が開かれているとは言えず、決して望ましい方向に進んでいるとは言えない状況です。結果として、高校も含めて、スポーツが「できる子」と「できない子」、「勝ちにこだわる活動をするチーム」と「サークル的にほどよく楽しく活動するチーム」など、二極化が進んでいるのが実情でしょう。

このような状況に入っていく子どもたち、よくよく情報をとり、見極め、自分で決めていかなければなりません。これまで巣立っていった子どもたち、さまざまな道を選んでいます。

・ 現状はまだ中学校部活動が実施されていますので、そこに入った子
・ クラブチームを選択して入った子
・ バスケット以外のスポーツを選択し、部活動に入った子、地域のスポーツクラブに入った子
・ スポーツではなく、文化部での活動を選択した子
・ 部活動やクラブ活動はせず、いわゆる「帰宅部」を選択した子

私は、どの道を選んでもいいと思っていますが、大事なことは「自分で決めること」、これだけは言い続けています。

長い教職経験、監督経験のなかで、親の進めでその気になって進学先や入部先を決めた子がいます。当面は「言われた通り決めてよかった」というケースがないわけではありませんが、自分のしたいことを他者に決めてもらって最後まで「よかった」と言える子は、そうそう多くないと思います。長い人生、誰もがどこかで壁にあたることはあるわけで、そのときに、はたと思いがよぎります。「自分で決めたわけじゃないのに」「言われた通りしてきたのに」、そして自分で考え判断し行動する習慣を身につけてこなかったために、どうしていいかわからず、つまづいたところから一歩も動けなくなります。大きくなっても親がずっと面倒見続けられるわけではありません。

また、入ってみて、「思ったのと違う」「評価してもらえない」「おもしろくない」「こんなはずじゃなかった」と、あきらめてしまうケースがあります。その後、切りかえができて新たな道を進み始めた子もいますが、何をやっても自分の思い通りにならないと、すぐにやめてしまい、自分の道を見失う子もいます。その場合、あのとき「お母さんが、お父さんが…言ったけ、こうしたのに…」と、親を恨んでしまうことにもなりかねません。

状況が一年一年めまぐるしく変化していますので、必要かつ確かな情報をとって、自ら判断し選択する力がとても重要になってきています。もちろん、子どもだけではどうしようもなく、ここだけは、どうしてもおとなの介入が必要という場合はありますが、それでも最後は自分で決めること、これが重要です。

これだけ急速に変化している社会状況です。子どもが社会に巣立つ５年先、10年先は、これまでの社会とはもちろん、今とも違った社会が拡がっているはずです。ＩＴ化、ＡＩ化が進むなかで、職種、採用選考の在り方、職場での働き方、あらゆるものが変わってきています。その波は、当然教育分野にも及んでおり、大学の講義、レポート、高校受験の方法や内容も変わってきており、これまでのように点数学力だけでなんとかなる時代は終わりを告げようとしています。中学校も小学校も授業そのものを見直さなければならない時代がきています。

そんな時代を迎えているなか、おとなの経験測も役に立ちづらいものになっています。おとなだからと言っても、数年先の社会がどうなっているのかは、わからないのが現状です。そのときどきに自分が直面する社会に向き合い、自分で考え判断し行動していかなければならない時代です。「お母さんが言ったから、お父さんが言ったから、こうしたのに…」ではなく、「自分で決めてよかった」、「自分で決めたんだからしょうがいない。もうちょっとがんばってみるか」と思えることが必要です。あるいは、「いったん区切りをつけて、別なところでもう一度やりなおそう」など、スイッチの切りかえも自分でできる力が必要です。おとなは、必要な介入以外は、見守り、励まし、応援する。子どもがつ

まづいても、子ども自身が決めてトライしたこと、チャレンジしたことだったら、また見守り、励まし、応援する、このスタンスがとても大事だと思っています。

“なかま”の力

もう一つ、併せて大事なのは、“なかま”の存在です。なかまとの出会い、つながりは、将来にわたって生きることがあります。なかまだからこそ言える「励まし」や「忠告」に支えられる関係性は貴重です。今大会でも、試合中のベンチからの声に背中を押されたり、気持ちを切り替えたりする光景があり、いい関係が育ってるなあと感じました。現６年生も、３年生からここに至るまで、日々トラブルもありながらきています。今は、以前のようなことはありませんが、たまに気のゆるみから失敗することもあります。状況に応じて、叱責する場合、諭す場合、対応はさまざまですが、いずれの場合も、そのつど学びに変えて、今の姿があります。今は下級生のトラブルの仲介役にもなり、しっかり話を聴いてやり、必要なアドバイスをおくったりしています。子どもは地域の中で、このようなつながりを育みながら、ともに育ち合い成長しています。